



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

CITATION:

花山だより. 天界 1937, 18(199): 13-13

ISSUE DATE:

1937-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167561>

RIGHT:

花 山 だ よ り

◆すゝきで覆はれた丘の上、實によく茂つたものだ。之は花山名物の一つと言へるかも知れない。人によつては、もう少し手入れしてこんな雑草を取拂ひ、天文臺の構内を一つの庭園として芝生を植ゑ花壇を作り松の木の枝を切つたりして美化したらとも考へるであらう。成程それは思つただけでも綺麗な天文臺である。しかし變り種の多い臺員の中には思ふ存分はびこつた雑草をこよなく愛し、これを刈り取る事を好まぬ人もある様だ。一本の草だつて生きてゐる！ デリケートなすゝきの叢、すゝきの穂、晝となく夜となく鳴く蟲の聲——「荒れはてた」とのみ形容する事勿れ！ 最も美しい自然の姿なのだ。

◆ひと夏、あまりにもひつそりしてゐた花山であつたが、ペル1の日蝕から山本臺長一行が歸られて急に天文臺も賑やかになり活氣づいて來た。去る9月17日午後、花山で第14回研究會が開かれ、山本先生をはじめ、柴田、堀井兩氏のペル1日食遠征歸朝談を聴く。快晴に恵まれ大成功を収めた日食をめぐつての報告があり、苦心談があり、異郷の旅の失敗談までが飛び出して時間の経過も忘れてゐた。話の後、今回の旅行中に得られた16ミリ・フィルムの映寫があり、臺長御自ら辯士と成つて説明をされる。會を閉ぢた時はもう日が暮れやうとしてゐた。

◆9月と云へば誰しも澄んだ秋空を想像するのに、今年は何故かひどくお天氣が悪い。しみじみと秋を感じる様な空を殆んど見ない。天文臺人にとっては正に憂鬱の一つ。支那事變——國家總動員の非常時に「のんきそうに星のぞき」等と言ふ事勿れ！ 花山にも稻葉、公文の兩少尉殿をはじめ第一補充の數人があり、何時でも飛び出せる用意は出來上つてゐるのだが、いよいよの前夜まで星のぞきこそ吾々に課せられた任務なのだから——。北支に、上海にあらゆる困難を克服して華々しい戦果を収めつゝある吾が皇軍の活躍を想ふ時、銃後にあつて吾々一同、一層の緊張と努力を以て皇國の文化の第一線に立つ戰士たるの覺悟がなければならない。

◆去る9月27日、柴田氏の御尊父逝去せらる。謹みて哀悼の意を表す。